

成長する教会

―主にあつて、主のために―

(一コリント三・六)

事前収録ばかりの年末番組を見ていて教えられたこと。それは今の日本の景気が「バブル状態」だということである。例の平野ノラさんのネタではない。実感は湧かないがホントにそうらしい。バブル絶頂期を大学と言つ名の遊園地で過ごした人間としては当時を思い出さずにはいられない。あの頃日本は輝いていた。「ジャパン・アズ・ナンバールワン」「ルック・イースト」といった具合に内外から評価され、巷は「いけいけどんどん」の熱にうなされていた。教会も同じ。アメリカで流行った教会成長運動が輸入され、わが教団でも宣教の総合計画「アッセンブリー一九九九」のもと、「全県にアッセンブリー教会を」と頑張つていたので。だが何時の頃からかこうした勇ましい標語は影をひそめ「閉塞感」とか「宣教の失敗」などのキーワードが教会の周りで散見されるようになった。「成長」という言葉を用いるのが憚られる空気なのだ。そんな時代の空気を讀まざるに(ー)我々の今年の標語は「成長する教会」である。以下、教会の成長について2つのことを考えたい。

一、成長の「力」は神にのみある

六節のことはを理解するためには当然のことながらその後関係を読まねばならない。そこに書かれているのはコリント教会の信徒たちによる分裂分派の状況である。どうも彼らはコリント教会の設立と成長に関わつた伝道者たちの名を用いて「パウロ派」「アポロ派」的派閥を作つていたようなのである。そうした状況に対してパウロは「確かに私たちは異なる働きをしてコリント宣教に励んだが成長させたのは神である」ということを強調している。興味深いのは口語訳では「成長させて下さるのには神である」と訳しているのに対して、それ以降の訳では「成長させた／させて下さつた」と過去形で訳していることである。ちなみに原文では過去を表わす時制が用いられている。つまりここでパウロが言いたかつたのは「神は成長させて下さるお方です」的普遍的真理に訴えることではなく、コリント教会に起こつた成長の軌跡に目を向けさせている。同時にここで展開される植物の暗喩も重要である。農夫は豊かな実りのために懸命に仕事を行う。しかし成長のエネルギーと設計図自体を彼らがつくり出すことは出来ない。それは種に宿つた、ある種神秘ときえ言つてよい力であり、その源は天地を創造し保持しておられる神なのである。

二、牧師・教師は神の協力者である

とはいえイエスも言つていられるように時かなくなつては種は育たないし、刈り込みがなければよい収穫は望めない。その意味で言えばパウロもアポロもコリント教会の成長のために労した存在であることは間違いない。実際パウロはこの教会の開拓に携わつていりし、アポロはパウロが去つた後、その雄弁の賜物を生かして教会を成長へと導いたのだ。

パウロとアポロ。彼らはある意味対照的な人間であり、コリント教会での関わり方も異なつていた。一人は開拓者であり、一人は成長を促した雄弁な説教家である。しかし彼らの間には遺恨やわだかまりはない。というのも彼らは主に与えられた奉仕の場所とステージの違い、そして何よりも働きの目標を共有していたからである。一寸考えてみよう。野球における先発と中継ぎとリリーフがいがみ合い、けなしあつていりるロッカールームを。そんな状況ではチームは決して勝てない。しかし教会では悲しいかな時にそうしたことが起こつてくる。一例を挙げれば伝道教団を標榜するわが教団の中には「開拓伝道最高」的なエートス(気風)がある。しかしこういった気風も度が過ぎると神の栄光を去らせかねない。そんなことを言い続けければある「人」があがめられてしまうからである。

神の民、キリストのからだ、聖霊の宮である教会においてあがめられるのは三位一体の神のほかは何もあつてはならない。働き手はどこまで行つても神の使命を達成する神の「道具」でしかないのだ。

* * *

そういうわけで「成長する教会」標語達成のためにまずやすべきことは、成長させて下さる主を崇め、全幅の信頼を寄せることになるだろう。イエスも言つていではないか。神の国はパン種のように、からだねの種のように拡大すると。目の前にある困難や閉塞感という雲の上にある神ご自身の光を日々祈りによつて取り込みたい。またこのために働く働き人については彼らに十分な敬い一つも不必要に崇めたり、身勝手な分派闘争の旗に掲げることは厳に慎むべきである。彼らは神の道具である。音楽の父、J. S. バッハは猛烈に忙しい作曲と演奏の日々の中、いつも楽譜の始まりに「(羅：イエスよ、助けたまえ)、そして終わりに(SDG(羅：神に栄光あれ)」と記していたという。彼はその天賦の能力を生かして教会に仕え、教会は栄えた。そして時が流れ研究者は彼を「魂のエヴァンゲリスト」と呼ぶ。この姿勢にならない、私たちも共に成長する教会を目指そうではないか。ハレルヤ!